

大学院生会員の方へ

The ISSP 15th World Congress での発表支援プログラム

The ISSP 15th World Congress (第15回国際スポーツ心理学会, 以下「ISSP大会」)が, 2021年9月30日(木)~10月4日(月)の日程で, 台湾の台北で開催されます。ISSP大会のURLは, <https://issp2021.com> です。

日本スポーツ心理学会として, ISSP大会での発表を支援するため, **ISSP大会に発表が採択された日本スポーツ心理学会所属(※1)の大学院生**に対して, 審査の上, ISSP大会の参加費(金額未定)を補助します(全員とは限りません)(※2)。なお, 補助は後払いとなります。

【ISSP大会発表抄録提出期間:2020年11月2日(月)~2021年3月10日(水)】

発表支援プログラムの応募締切: **2021年9月15日(水)**

- ・申込用紙は, 研究企画情報委員会(jssp-plan20(at)pmcl-ouhs.jp)まで, メール添付で送付してください。
- ・ISSP大会終了後, 2021年11月上旬までに, ISSP大会での発表の要旨と参加の感想を, 1,500字程度(最大21字×42行×2段程度の1ページ分)にまとめた報告書を提出していただき, 学会誌に掲載します。

※1 日本スポーツ心理学会の2021年度会員(2021年4月以降に入会した者も含む)であり, かつ, 本支援プログラム応募時までに, 日本スポーツ心理学会の2021年度分の会費を納入している者

※2 本発表支援プログラムとは別に, 「2020年および2021年分のISSP年会費(20USドル/年)を支払い, ISSP大会の会期中に行われるMC(Managing Council:いわゆる「理事会」)の役員選挙で投票を行った会員」には, 発表の有無にかかわらず, 申請により, **2年分のISSP年会費を補助**します(上述の役員選挙では, 日本からの立候補も予定されています)。なお, **2020年分のISSP年会費の支払期限は2020年12月**です。詳細は, 近々, 日本スポーツ心理学会HPに掲載され, メールでも案内いたします。

提出していただく報告書の書式です。

English title
日本語タイトル

English author name (affiliation)
日本語名前 (所属)

これまでのアスリートの中樞情報処理能力に関する研究は、主に反応時間を指標にした報告がされてきた。行動指標の1つである反応時間は、刺激の呈示から反応の開始までの経過時間を意味し、行動が直接観察できる客観性に優れた指標である。これまでの研究では、単純反応時間ではスポーツ選手と一般人に違いはない (McLeod, 1987)。一方で、選手が専門とするスポーツに慣れた状況では選手の反応時間の方が短い (Mori and Shimada, 2009) ことが明らかになっている。Weiss (1965) は、反応時間を刺激呈示から運動の開始に先行する筋活動開始までの時間 (premotor time) と筋活動開始から実際の運動開始までの時間 (motor time) に分けて測定しており、反応時間とpremotor timeの変動はよく一致し、その相関は高かった。従って、反応時間は中樞の情報処理能力を反映することを示唆し、反応時間が短いことは情報処理能力が高いことを報告している。しかし、反応時間は、刺激の入力から中樞の情報処理段階、反応の出力をすべて経た「結果」として生じる運動行動であり、反応時間から情報処理過程を推定し、評価することは困難である。その点、脳生理指標であるERPは、認知に関わる刺激の分類や評価を反映するため、反応時間だけでは明らかにできなかった中樞の情報処理の「過程」を詳細に検討するには極めて有効である。これらのことから、行動指標である反応時間は刺激呈示から行動の発現までの経過時間とし、ERPをその間に介在する認知過程の検討に用いることで、一連の情報処理過程を捉え

2000)。さらに、アスリートは一般の大学生と比べて、複雑な刺激の処理を学習する認知機能が優れていることが明らかにされており (Jocelyn 2013)、アスリートは刺激情報の認知処理が優れていることを報告している。しかしながら、松竹ほか (2016) のように、アスリートの認知情報処理に関して、課題の難易度に焦点を当てた研究はまだ少なく、アスリートの認知情報処理過程の特徴について基礎的な知見を重ねていくことが求められる。

また、反応時間においては、覚醒水準との関連を示す研究が多くなされている。Cox (1990) は、覚醒は注意集中が課題に直接影響することを報告しており、Gwynes and Eason (1969) は、主観的な覚醒水準の高さが最適である時、反応時間は短縮することを示している。さらに、石橋と吉田 (2000) は覚醒の低下に伴って反応時間が遅延し、パフォーマンスの低下を招くことを報告している。このことから、アスリートの迅速な認知情報処理には、前提として覚醒水準を保つことが求められ、反応時間とERP (P3) 測定と同時に、心理検査により実験参加者の主観的な覚醒水準を測定し、多面的な検討を行う必要性が挙げられる。

以上のことから、アスリートと非アスリートのP3を比較し、パフォーマンスを発揮する上で重要なポイントとされる認知スキルを客観視することは、アスリートの認知情報処理の特徴を捉える上で重要な課題だと考えられる。そこで本研究では、選択的注意反応課題におけるアスリートと非アスリートのERP (P3) と反応

本文
21字×31行×2段
=1302字

26